

幸田露伴『運命』における歴史叙述の問題

―建文出亡から考えて―

王 菁 潔

はじめに

幸田露伴の『運命』は大正八（一九一九）年四月に雑誌『改造』の創刊号に発表され、忽ち注目を浴び、露伴の文壇復帰の作とされた。明時代の建文帝と叔父の燕王とが帝位をめぐって戦い、燕王は勝ち永楽帝となり、建文帝は負けて僧となった。だが、皇帝となった永楽帝は征戦を続けて最後に辺境で亡くなり、一方、建文帝は漂泊した後、宮中で長寿を全うする。以上の筋を『明史』や清・谷応泰の『明史紀事本末』（以下『本末』と略す。）等をもとに描いたのが本作品である。

原典との比較を行った先行論に、田中美樹と井波律子の論考がある。田中は具体的に資料を比較検討し、露伴が史料を加工する方法が「構想にそわない史実を削除」し、「歴史書に記述された事実」のみによって「独自の虚構の世界」を生み出すことであると指摘し、作品のテーマを「徳」と「力」が分裂し争闘する悲劇」としている。井波は建文帝の後日談における露伴の判断や解釈を指摘し、露伴は「政治的・軍事的、つまり現世的な価値基準における勝者と敗者の立場を逆転させ」、道家思想である「心の安らぎ」を称揚した

と述べている。これらの研究は史料との比較において、『運命』研究の基盤を成しており、田中の比較の結果である史料の加工する方法、また井波の建文帝の後日談における永楽帝と建文帝との対比的描写に関する指摘に筆者は賛同するが、それぞれの研究が導き出した『運命』のテーマより、むしろテーマを描く作品の方法こそ問題を孕んでいると考える。

ここで留意したいのは、『運命』には「予」という語る主体が存在する点である。史料の引用の間に、「予」がしばしば顔を出す。従来の先行論はこの「予」を露伴として考えている。例えば、『運命』の冒頭では語り手が「造物の脚色は、綺語の奇より奇にして、狂言の妙より妙に、才子の才も敵する能はざるの巧緻あり、妄人の妄も及ぶ可からざるの警拔」があると述べ、小説、稗史、戯曲や寓言等の「烏有の談」ではなく、「造物の脚色」、所謂歴史記述の奇を示そうと宣言している。福本雅一は右の宣言と、昭和一三年七月発表の『運命』自跋^①において『運命』に書いた建文出亡のことが銭大昕の「萬先生伝」によれば史実で無かったと露伴自身が認めたこととの矛盾について、「萬先生伝」の信憑性を疑い、萬斯同が建文出亡を史実として考えていたと指摘している。そして、「自跋」を持ち出さなくても、植村清二^②や高橋菊弥^③は建文出亡の原典である『本

末』卷一七（建文遜^レ国）が材料を史仲彬の『致身録』や程済の『從亡隨筆』といった隨筆類から取り、結局稗史に基づいたものと述べ、冒頭部分に「稗史」と否定することとの矛盾を指摘している。

しかし、語り手の「予」が小説、稗史、戯曲や寓言等の「烏有の談」ではなく、「造物の脚色」という歴史記述の奇を示そうとすることから、歴史記述をフィクションではなく、事実として認識していることが分かる。一方、露伴は「運命」自跋において「吾嘗て曰く、虚言を束し來つて歴史有りと」と述べ、これは明治三七（一九〇四）年に『読売新聞』で発表され、翌年に単行本にされた長篇叙事詩『^{あまの}出處』（春陽堂）第二篇第一三章に「世に事実ほど虚偽は無く、虚誕を束ねて歴史成り出づ」の言葉がある。つまり、露伴は「運命」を執筆する以前より、歴史記述は一種のフィクションであるという認識を持つている。更に、『運命』において、「無人称」を用いて客観的に歴史を叙述するのではなく、「一人称」の語り手を導入しており、これは歴史とは誰かが語るものという認識の表明となっている。このように、語り手の「予」と露伴との歴史認識は異なっており、両者を区別すべきである。本論は、露伴の一人称の語り手を導入した歴史叙述の方法に注目し、まず史料を操作する痕跡が著しく見られる戦争後、建文帝と永楽帝との運命の逆転する部分を考察し、「予」がどのように歴史記述に拠りつつ語り直しているかを確認したい。

一、建文出亡

建文帝と燕王との戦争は建文帝の敗北で幕を閉じた。建文帝のその後の行方は以下のように語り手によって推論されている。

建文皇帝果たして崩ぜりや否や。明史には記す、帝終る所を知らずと。又記す、或は云ふ帝地道より出で亡ぐと。又記す、滇黔巴蜀の間、相伝ふ帝の僧たる時の往来の跡ありと。これ言を二三にするものなり。帝果して火に赴いて死せるか、抑又髪を薙いで逃れたるか。明史卷一百四十三、牛景先の伝の後に、忠賢奇秘録および致身録等の事を記して、録は蓋し晚出附會、信ずるに足らずの語を以て結び、①暗に建文帝出亡、諸臣庇護の事を否定するの口氣あり。②然れども卷三百四鄭和伝には、成祖（永楽帝）引用者注、恵帝（建文帝）引用者注の海外に亡げたるを疑ひ、之を蹤跡せんと欲し、且つ兵を異域に輝かし、中国の富強を示さんことを欲すと記せり。鄭和の始めて西洋に航せしは、燕王志を得てよりの第四年、即永楽三年なり。永楽三年にして猶疑ふあるは何ぞや。③又給事中胡濙と内侍朱祥とが、永楽中に荒徹を遍歴して数年に及びしは、卷二百九十九に見ゆ。仙人張三丰を索めんとすといふを其名とすと雖、山谷に仙を索めしむるが如き、永楽帝の聰明勇決にして豈真に其事あらんや。得んと欲するところの者の、真仙にあらずして、別に存するあること、知る可き也。

これは建文帝が戦争中に亡くなったか、それとも出亡したかにつ

いて、語り手が『明史』を手がかりに論述する部分である。引用文中から分かるように、『明史』では建文帝の行方に関する記述が一定していない。というのは、傍線部①の通り、建文出兵の事を否定する箇所もあるが、傍線部②の通り、巻三〇四（鄭和伝）では永楽帝が建文帝が海外に逃げたのではないかと疑う記述もある。語り手はそれらを述べた上で、傍線部③の通り、巻二九九（張三丰伝）によって、永楽帝の命令で胡濙が仙人を捜すエピソードを紹介し、さらにこれは仙人の他に、建文帝を捜そうとしたのであらうと推測している。『明史』には、鄭和の航海の意図が建文帝を捜すことであると明記されているが、胡濙の求仙に同様の目的が含まれていたとの記述は存在しない。このように推測した背景には、『本末』（建文遜国）の以下の記述があると思われる。

五年冬十二月、建文帝祭死難諸人、自為文哭之。時朝廷偵帝甚密、戸科都給事胡濙訪求張三丰、蓋為帝也。帝知之、遂遁跡不出。

（谷応泰『明史紀事本末』巻一七（建文遜国）、以下同）
右記のように、『本末』では、胡濙が張三丰を訪ねたのは、実は建文帝を捜す為であったと書かれている。この『本末』の記述を手がかりに、永楽帝が建文帝を捜したと推測したのであらう。ちなみに、『本末』（建文遜国）では「時胡濙・鄭和、数往來雲貴間、踪跡建文帝。」と鄭和と胡濙が共に建文帝を捜していたことが記述されている。作者はそれを契機に『明史』の鄭和伝と張三丰伝とを参看した可能性が高い。ともかく、語り手が鄭和の航海も胡濙の求仙も建文帝捜しの目的を含むことを記したのは、建文帝が生きて

逃亡したということの意味する。以上のように、『明史』は建文帝の行方について断定していないが、語り手は『本末』に記述された建文帝捜しのことを描き、正史の『明史』によって推測する方法でその信憑性を高めている。

その上に語り手は永楽帝が建文帝を捜す動機を提示している。それは次に描かれたように、明朝の辺疆で、外敵が甘肅に乱入した事態に関連している。

若し建文帝にして走つて域外に出で、幅強にして自大なる者に依るあらば、外敵は中国を覼ふの便を得て、義兵は邦内に起る可く、重耳一たび逃れて却つて勢を得るが如きの事あらんとす。是永楽帝の懼れ憂ふところたらずんばあらず。鄭和の艦を浮めて遠航し、胡濙の仙を索めて遍歴せる、密旨を銜むところあるが如し。

傍線部は『春秋左氏伝』（僖公二三年）に拠る話である。重耳は春秋時代晋の公子。父献公が驪姫に迷つて、彼女の生んだ子に国を譲ろうとしたので、禍を恐れた重耳は数人の忠臣と共に国外に逃亡し、辛酸を嘗めた後帰国し、晋の文公となり、諸侯に号令して春秋五霸の一人となった。重耳のように、もし建文帝が外敵を連れて帰れば、国内の義兵と合わせて永楽帝の政権を動揺させる可能性があるため、永楽帝が鄭和と胡濙に命じて密かに建文帝のことを捜したと書かれている。語り手が明朝の辺疆の情勢を分析することにより、建文帝捜しということの裏付けをしている。

以上、永楽帝の建文帝捜しを正史の曖昧な記述を利用して推測し、更にその動機を示すことによって、語り手は建文帝が生きているこ

とを暗示して見せた。このように、戦争の終焉の時点で、建文帝と永楽帝との運命は定まったわけではなく、更なる運命の転変が孕まれることとなる。

それ以降、原典の書名を挙げずに『本末』巻一七（建文遜_レ国）に拠り、『明史』に記述されていない建文出亡の経緯を年代順に描いていく。建文帝が敗戦して、僧侶を装い宮中から逃げ出し、漫遊して最後にまた宮中に戻り、天寿を全うする。また、その間に永楽朝の出来事が『明史』巻五十一巻七（成祖本紀）、卷三三二（西域伝）及び『本末』巻二二（親征漠北）に拠って書かれている。次にこれらの箇所を原典と比較しながら、語り手が描こうとした戦争後の建文帝と永楽帝の人物像を明白にする。

二、「優游自適」の建文帝

敗北して出亡した建文帝について語り手は以下の二箇所において、「優游自適」だと述べている。

建文帝は今レは僧_レ応文たり。心の中はいざ知らず、袈裟に枯木の身を包みて、山水に白雲の跡を逐ひ、或は草庵、或は茅店に、閑坐して漫遊したまへるが、燕王今は皇帝なり、万乗の尊に居りて、一身の安き無し。

これより帝優游自適、居然として一頭陀なり。

語り手は逃げ出した建文帝について、僧侶の身分を強調し、「優游自適」の生活を送っていると述べている。その造形は『本末』の

建文帝像と大きく異なっている。以下に幾つかの例を見てみよう。

十五年史彬白龍庵に至る、庵を見ず、驚訝して帝を索め、終に大喜庵に遇ひ奉る。十一月帝衡山に至りたまふ、避くるある也。この引用は『本末』と一致しているが、傍線部の「避くるある也」とは何を避けたいのか不明である。以下の部分を『本末』と比較することによって、建文帝の避けたかったものは明確になる。

永楽元年、帝雲南の永嘉寺に留まりたまふ。二年、雲南を出で、重慶より襄陽に抵り、また東して、史彬の家に至りたまふ。留まりたまふこと三日、杭州、天台、雁蕩の遊をなして、又雲南に帰りたまふ。

作品の中では、ただ建文帝が史彬の家に三日間泊まったと簡略化されている。原典では、このエピソードがさらに詳細に記述されている。

二年春正月、建文帝離雲南、由重慶抵襄陽。六月、入吳。八月八日、復至史彬家。時天將暝、彬家已舉火矣。帝突至、彬及家人出拜。舉酒半酣、帝曰、我明農当即去。彬云、臣掃門而俟、久矣。即有不_レ肅、亦乞_レ見原。欲留師數月、明農何遽耶。先是、帝命從亡者俱師弟称、故彬等呼為師。帝泣曰、彼方急_レ圖我。昨於西安道中、見冠蓋來者、瞪目視我。此臣我目善_レ之、彼必有_レ以_レ奏也。東南通臣、屈指先汝、我去政為_レ汝計。対哭久之。且曰、此近宮闕、不便。彬曰、亦無_レ害。視帝衣履敝甚、固留三日、命家人製布衣而去。

建文帝が黄昏に史彬の家を密かに訪ね、史彬は彼を長く滞在させようとする。だが建文帝は官吏に捕まるのを恐れ、翌朝にすぐ史彬

の家を後にするつもりであると書かれている。建文帝は追捕する者を避けようと心がけている。「避くるある也」の対象は建文帝を捜す永楽帝側の者と考えられる。このような逃亡生活の中、建文帝は心が安んじるはずがないのである。このエピソードは語り手の言う「優游自適」の「備忘文」像と齟齬しており、そのため引用されなかったと考えられる。また建文帝が病気になるエピソードが次のように書かれている。

夏帝白龍庵に病みたまふ。史彬、程亨、郭節たま／＼至る。

三人留まる久しくして、帝これを遣りたまひ、今後再び来たる勿れ、我安居す、心づかひすなど仰す。帝白龍庵を捨てたまふ。

建文帝が病を患い、従臣等が来たが、来ないようにと言い、落ち着いた対応をしている。これもやはり「優游自適」の建文帝像に即している。しかし、原典では更に詳しい記述がされており、そこからは違う建文帝像が呈示されている。

帝復結菴於白龍山。顔色憔悴、形容枯槁。夏月患痢、因有戒心。不能出山覓膳、狼狽殊甚。適史彬・程亨・郭節

訪至。帝相对大慟、随問曰、汝等携有方物否。各為献。史彬独有饌、而所献豊。且当年職居禁近、知帝所好。帝遍嘗之曰、不食此已三年矣。三人相留許久、帝遣之帰。

別時痛哭失声。帝属曰、今後勿再来。道路阻修一難、関津盤詰二難。況我安居、不必慮也。彬等叩首領命而去。後帝復舍白龍菴他去。

【本末】卷一七（建文遜国）では、建文帝は病気になっても、永楽帝の搜索への「戒心」のため山に籠り、食事を探せずに狼狽した上、

訪れてきた旧臣たちの前で泣き崩れ、さっそく食べ物要求したと書かれている。心身共に弱い凡人の姿はこの病気のエピソードにはつきり映し出されている。しかし、作中ではそれが略されており、ただ「我安居す」等といった臣下を思いやる言葉が引用され、建文帝の冷静な対応が描かれているのである。この原典の削除は田中も指摘している。このように、原典の文章が引用されているが、一部の省略によって、まったく違う建文帝像が描かれることとなる。また、建文帝が永楽帝の死を聞いた場面は次のように原典の【本末】と異なる描き方がされている。

二十二年春、建文帝東行したまひ、冬十月史彬と旅店に相遇ふ。（中略）永楽帝の死（引用者注）永楽帝既に崩じ、建文帝猶在り、帝と史彬と客舎相遇ひ、老実貞良の忠臣の口より、篡国奪位の叔父の死を聞く。世事測る可からずと雖、薙髪して宮を脱し、墮涙して舟に上るの時、いづくんぞ茅店の茶後に深仇の冥土に入れるを談ずるの今日あるを思はんや。あ、亦奇なりといふべし。知らず応文禪師の如何の感を為せるを。即ち彬とともに江南に下り、彬の家に至り、やがて天台山に登りたまふ。

二十二年春二月、建文帝東行。冬十月、与史彬相遇於旅店。言及榆木川、稍色喜。史彬問道路起居状、答曰、近来強飯、精爽倍常。即同彬下江南、至彬家。

榆木川は永楽帝が亡くなった場所である。原典では、永楽帝の死に対して建文帝が喜びの表情を見せたと書かれている。さらに近來食欲を増し、「精爽倍常」と言うことから、今後追捕されること

がなくなり、安心した思いを垣間見ることができるとある。『運命』では建文帝がかつての敵の死に快意を覚える部分が削除され、代わりに「知らず応文禪師の如何の感を為せるかを」と述べ、有為転変に対する感無量の情より達観の心境へと導かれる建文帝の像が維持されている。田中と井波もこの原典との異同に注目している。

以上見てきた通り、原典の『本末』に記述された建文帝の逃亡生活からは、彼が一人の人間としての喜怒哀楽を有していることが窺える。しかし、『運命』では、敗戦して逃亡した建文帝が「優游自適」の「僧応文」として語られ、それと齟齬する原典のエピソードが引用されていない。このように戦争では負けたが、情、欲、榮、辱に惑わされない、心が安んじている人物として建文帝は描き出されている。

三、「安き無し」の永楽帝

先述した通り、建文帝が逃亡した後、年代順にその事跡が語られているが、その間に永楽帝をはじめとする永楽朝の事件が挿入されている。井波の指摘した通り、この戦争後の部分において、建文帝と永楽帝とが明らかに対比して描かれているのである。例えば前掲の引用のように、建文帝が「優游自適」であるのに対して、永楽帝は「今は皇帝なり、万乗の尊に居りて、一身の安き無し」と描かれている。永楽帝は辺疆の擾乱に対し、次のように憂慮が絶えない状態に置かれている。

永楽元年には、韃靼の兵、遼東を犯し、永平に寇し、二年には

韃靼と瓦剌（Oirats 西部蒙古）との相和せざる為、に、辺患無しと雖、三年には韃靼の塞下を伺ふあり。特に此年はタメルラン大兵を起して、道を別失八里（Beshbalik）に取り、甘肅よりして乱入せんとするの事あり。甘肅は京を距る遠しと雖、タメルランの勇威猛勢は、太祖の時よりして知るところたり、永楽帝の憂慮察す可し。此事明史には其の外国伝に、朝廷、帖木児の道を別失八里に俛りて兵を率ゐて東するを聞き、甘肅総兵官宋晟に勅して儆備せしむ、とあるに過ぎず。然れども塞外の事には意を用ゐること密にして、永楽八年以後、数々漠北を親征せしほどの帝の、帖木児東せんとするを聞きては、奚んぞ能く晏然たらん。太祖の洪武二十八年、付安等を帖木児の許に使せしめて、安等猶未だ還らず、忽ちにして此報を得、疑虞する無きを得んや。（中略）タメルランの来らんとするや、帝また別に虞る、ところあり。蓋し燕の兵を挙ぐるに当つて、史之を明記せずと雖、韃靼の兵を借りて以て功を成せること、蔚州を囲めるの時に徴して知る可し。建文未だ死せず、從臣の中、道衍金忠の輩あつて、西北の胡兵を借るあらば、天下の事知る可からざるなり。鄭和胡濙の出づるある、徒爾ならんや。建文の草庵の夢、永楽の金殿の夢、其のいづれか安くして、いづれか安からざりしや、試に之を問はんと欲する也。

永楽帝が在位する間、北の辺疆に擾乱があり、外敵を恐れるだけでなく、建文帝が外敵と連携することをさらに不安に思っていることが描かれている。北の辺疆の擾乱は史料を引用しているが、傍線部分の永楽帝の不安の理由が建文帝の復権であることは、語り手の

推測である。このように語り手は再び建文帝の「草庵の夢」と対比して、永楽帝の「金殿の夢」は「安からざりし」と述べている。その次に永楽帝が外敵を駆逐しようと、度々親征することが記される。此歳（永楽八年―引用者注）永楽帝は去年丘福を漠北に失へるを以て北京を発して胡地に入り、本雅失里（Benyashili）阿魯台（Altai）等と戦ひて勝ち、擒狐山、清流泉の二処に銘を勤（勒）の誤植か―引用者注）して還りたまふ。

此歳（永楽一二年―引用者注）永楽帝また塞外に出で、瓦剌を征したまふ。皇太孫九龍口に於て危難に臨む。

此歳（永楽十九年―引用者注）阿魯台反す。二十年永楽帝、阿魯台を親征す。

右記のように、永楽帝が度々辺疆に親征し、皇帝の身ではあるが「安き無し」の生活が続いている。しかし、原典の『本末』巻二（親征漠北）において、永楽帝の親征はさらに詳細に記述されており、彼の軍事的才能が発揮される場面が多くある。例えば、永楽八年の親征については次のように書かれている。

五月丁卯朔、入臚胸河、哨馬略黃峽、遇寇騎、得箭一矢、馬四疋而還。甲戌、指揮款台略玉華峰、擒一騎、詔之、始知寇在兀古兒札河、大兵遂渡飲馬河。乙亥、以清遠侯王友駐兵河上、留金幼孜營中。上以輕騎前進、人齎二十日糧、以方賓、胡弘隨。戊寅、至兀古兒札河、本雅失里先遁、夜倍道追之。己卯、至幹難河、元太祖始

興之地也。本雅失里率衆拒戰、上麾前鋒迎擊、一鼓敗之、本雅失里棄輜重、以七騎渡河遁去。六月、班師至飛雲壑、阿魯台復來戰、上率精騎衝陣、大呼奮擊、阿魯台圍馬復上、我師乘之、追奔百余里、斬其名王以下百數十人、阿魯台携家屬遠遁。時熱甚、乏水、軍士飢渴、遂收兵還營。己酉、軍駕發広漠、時殘騎尚出沒尾我、上命伏兵河曲、佯以數人載輜重誘之、上按精兵千余最後發。寇望見大兵渡河、食所載物、競趨而至、伏發、倉皇走、上率兵扼之、奔渡河馬、陷入泥淖、生擒數十人、遂無敢窺我後。師次擒狐山、上令勒銘曰、潞海為鐔、天山為鐔、一掃風塵、永清沙漠。次清流泉、又勒銘曰、於鐔六師、禁暴止侮。山高水清、永彰我武。會軍士乏食、上令以所儲供、御糧鈔散給之、下令軍中糧鈔多者許借貸、還京倍酬其直、軍中賴之。上在師中、每日暮猶未食、中官具進膳、上曰、軍士未食、朕何忍先飽。七月、還次開平、宴勞將士。上曰、朕自出塞、久素食、非乏肉也。念士卒艱食、朕食肉豈能甘味、故寧已之。車駕還至北京。原典では、永楽帝の親征する経過が詳細に記述されている。厳しい自然の中、永楽帝は自ら先頭に立ち戦い、謀略を用いて敵に勝利し、擒狐山と清流泉においてその功を刻して残す。さらに、食料が不足した時に、自身の米を軍士に配り、軍士が食べる前に食事をせず、一人で肉を食べずに軍士等と甘苦を共にするエピソードが記述されている。このように、智勇兼備で、軍士を愛護する良き指導者の姿が読み取れる。特に傍線部では永楽帝が身の安全を顧みず先頭

に立ち戦う勇姿が描かれる。『運命』ではそれらのエピソードが引用されず、ただ在位中、度々征戦する永楽帝が描かれているだけなのである。このように、戦争後敗者である建文帝が「優游自適」の生活を送っているのに対して、勝者である永楽帝の外敵との交戦の連続を外的に点描するだけで、「安き無し」状態が強調されている。遂に両者の境地も戦争の結果と逆転することになる。

四、逆転する結末

皇位争いで負けた建文帝は「宮中に在り、老仏を以て呼ばれたまひ、寿をもて終りたまひぬ」と、『本末』巻一七（建文遜_レ国）の「帝既入_レ宮、宮中人皆呼為_レ老仏、以_レ寿終。」に拠って語られている。一方、勝った永楽帝は、先述した辺疆に親征する途中で亡くなった。此歳阿魯台大同に寇す。去年阿魯台を親征し、阿魯台遁れて戦はず。師空しく還る。今又塞を犯す、永楽帝また親征す。敵に遇はずして、軍食足らざるに至る。①帰路榆木川に次し、急に病みて崩す。②蓋し疑ふ可きある也。

傍線部①は『明史』の記述に拠って、永楽帝が病死したと書かれている。しかし、傍線部②のように、語り手の「疑ふ可きある也」という一言によってその死の記述に対して疑問が突きつけられている。このことについて結末部で、次のように述べられている。

女仙外史に、忠臣等名山幽谷に帝を索むるを記する、有るが如く無きが如く、実の如く虚の如く、縹渺有趣の文を為す。永楽亭榆木川の崩を記する、鬼母の一剣を受くとなし、又野史を引

いて、永楽帝榆木川に至る、野獣の突至するに遇ひ、之と搏す、攫されてたゞ半軀を剩すのみ。殮して而して匠を殺す、其迹を泯滅する所以なりと。野獣か、鬼母か、吾之を知らず。西人或は帝胡人の殺すところとなる為す。然らば即ち帝丘福を尤めて、而して福と其の死を同じうする也。帝勇武を負ひ、毎戦危きを冒す、榆木川の崩、蓋し明史諱みて書せざるある也。

語り手は永楽帝の病死説を疑い、『女仙外史』における永楽帝が「鬼母」か「野獣」に殺された説を紹介した後、敵に殺されたという、永楽帝の自負していた勇武への皮肉の死に方であると推定している。このように語り手は歴史記述を選別しながら、意図的に語り直している。

おわりに

以上戦争後の建文帝と永楽帝との運命の逆転する部分を考察してきた。建文帝の行方を検討する時、語り手が意図的に正史の『明史』を利用し永楽帝が建文帝を捜していると述べ、更に明朝辺疆の情勢によって永楽帝の建文帝捜しの動機を示している。こうして建文帝が宮中から出亡したことを歴史事実のように叙述している。そして建文帝と永楽帝との運命が戦争の際に定まったのではなく、更に変化していくように仕掛けている。語り手の描いた「優游自適」の建文帝と「安き無し」の永楽帝の人物像を基準に、原典の『本末』の史料が取捨選択されている。最後に、建文帝の長寿と対比して、永楽帝が勇武でありながら戦死したと、歴史記述を判別しながら語っ

ている。このように「予」の主観的な語りによって明時代のこの歴史事件が叙述されている。

先行論は両皇帝の運命の逆転により作品のテーマを見出しているが、むしろ「予」という語り手によって一大事件を歴史事実のように語り、しかも語り手の主観によって史料を裁断するという一種の歴史叙述が呈示されている。露伴は歴史とは一種のフィクションであると認識しつつ、『運命』において歴史記述に拠って史実を示そうとする「予」を仕掛けている。「自跋」に「史と云はんや、史と云はんや、これ当時の小説を伝ふるのみ」と「予」の歴史叙述の本質を突いている。今後の課題として『運命』の残りの部分を考察し、また同時代の歴史叙述の問題を背景に、露伴が『運命』を書いた意図を明確にさせたい。

注

- (1) 『明史』は『中国史籍解題辞典』（神田信夫、山根幸夫著、塙原書店、平元・9）によれば、明一代の正史であり、本紀二四巻、志七五巻、表一三巻、列伝二二〇巻より成る。四たび編修し、九〇年を費やして一七三九年に勅定を受けた。本書は史料を博搜しており、校証も厳密なので、従来の正史に比べれば最もすぐれていると言われる。構成において建文の本紀を立て、土司・西域・外国三伝では建州女直と南明に関する記述は意図的に省かれており、清朝の立場が反映されている。
- (2) 『明史紀事本末』は前掲注1の『中国史籍解題辞典』によれば、清の谷応泰が一六五八年に完成したもの。明代の主要事件の顛末を各事件ごとにそれぞれまとめ、各巻末に論断を付す。明史稿、明史の編纂以

前に成立したものである。例えば建文帝伝説を史実として扱う点等史料の扱い方に問題もあるが、明史には見られない記事を含み、明代の政治過程を知るのに便利である。露伴の『共命鳥』（『淑女画報』大5・9/10）では「谷氏記事本末」の別名で原典として挙げられている。

(3) 『運命』に使用された史料に関して、福本雅一「注釈『運命』（日本近代文学大系 幸田露伴集）角川書店、昭和49・6）が詳細に注釈を付している。

(4) 田中美樹「空想なき虚構」の世界——幸田露伴「運命」研究」（『学習院大学国語国文学会誌』28号、昭和60・3）

(5) 井波律子「露伴の中国小説——『幽情記』と『運命』について」（『隔月刊文学』6巻1号、平17・1）

(6) 作中では、一人称の語り手が「予」、「我が」、「吾が」等に表記されている。本論は主語格の「予」を用いる。

(7) 前掲注3、補注三一四、五四九頁

(8) 幸田露伴「運命」自跋（『文学』6巻7号、昭和13・7）、後に岩波文庫版『運命』（岩波書店、昭和13・8）に収録される。

(9) 植村清二「運命」伝説について」（『露伴全集』月報23、岩波書店、昭和28・12）

(10) 高橋菊弥「露伴『運命』の原典について——「從亡隨筆」を中心として——」（『弘前大学国語国文学』4号、昭和53・3）

(11) 谷応泰「明史紀事本末」の引用は、筑波大学附属図書館所蔵の『歴朝紀事本末九種』巻四十九―巻五十五（横記書莊、一八九九）に拠る。

(12) 永楽帝の死について、『明史』巻七（成祖本紀三）では「庚寅、至榆木川、大漸。遺詔位皇太子、喪礼一如高皇帝遺制」。辛卯、崩、

年六十有^レ五。」と記述されている。大漸とは、病勢が段々と進んで危篤になることであり、永楽帝が病死したと書かれている。『明史』の引用は、筑波大学附属図書館所蔵の乾隆四（一八三九）年校刊の『明史』（五洲同文局、一九〇三）に拠る。

【附記】作品の引用は初出に拠り、漢字の字体は通用字体に改めた。